



日豪交換研修 2013 報 告



(公 社) 日 本 コ ン サ ル テ ィ ン グ ・ エ ン ジ ニ ア 協 会

日豪交換研修 2013 総括

株式会社建設技術研究所 執行役員
技術研修委員会副委員長 金井 恵一



豪州との交換研修制度は、1995年に締結されたAJCEとオーストラリアコンサルティングエンジニア協会ACEA(現 コンサルト・オーストラリアCA)による日豪覚書に基づいて翌96年から始まった両国の若手エンジニアの相互訪問・研修のプログラムで、ここで培われる人脈や関係を生かした共同ビジネス発掘への展開を目指したものであります。過去15年以上にわたり合計130名を超えるヤングプロフェッショナルがこの研修で学んでおり、FIDICの中でも外国研修の成功例として注目を集めています。10年を経過した2006年に研修制度の見直しを行い、訪問期間中だけでなく、数ヶ月の準備期間にも研修生と受け入れ先企業との対話を通して事前研修を行うなど、いくつかの改良を経て現在に至っています。

2013年は、日本のコンサルタント企業7社から7名の若手技術者が、3週間にわたってオーストラリア4都市の7企業で研修を受けました。帰国後に開催された研修報告会では、それぞれの専門分野での意見交換、実際の業務実施補助、現場見学、勉強会やセミナーへの参加など、大変充実した3週間の様子が報告されました。また、勤務体制や職場環境、住環境やワークライフバランスなど、訪れてみてはじめてわかる日豪の違いを肌で感じる貴重な体験をしたとの報告も多くなりました。

研修生のみなさんは、今回の研修で得たものをベースに更に自己研鑽に努めるとともに、訪問の実感が消えないうちに、送り出してくれた所属企業のみなさんにもその成果を何らかの形で還元してください。また、現地で築いたネットワークを維持・発展させて、将来のビジネスチャンスに繋げていただきたいと思います。

2014年には、オーストラリアからの研修生をAJCEが受け入れることとなります。両国の関係を継続的に維持するため、今回研修生を派遣していただいた会員企業におかれては、来年の受け入れについても格別のご配慮をいただきたく、よろしくお願い申し上げます。



1995年10月14日

日豪覚書締結 全日空ホテル(東京)にて
左から 豪州マクマラン貿易相、ACEAケル会長、AJCE梅田会長、池田科学技術庁審議官、




覚書

研修生および研修企業



URS Brisbane

深谷 正史
日本工営(株)
専門：Railway Planning



Norman Disney & Young Sydney Melbourne

井村 修二
(株)森村設計
専門：Mechanical




Costin Roe Sydney

安達 理央太
(株)日水コン
専門：Water Supply Planning



AECOM Brisbane

金子 拓史
(株)建設技術研究所
専門：River planning



muel Adelaide

福澄 浩恒
(株)長大
専門：Bridge Design



NORTHROP Sydney

高木 沙織
(株)国際航業
専門：Urban planning



aurecon Brisbane

増田 淳
(株)オリエンタルコンサルタンツ
専門：Transportation Planning

全体日程

2013年	3月	CA 受入企業募集
	4月	AJCE 研修生募集
	5月	研修生決定
	7月 2日	第1回説明会開催 事前研修実施
	9月 12日	第2回説明会
	10月 14日	訪問研修
	~	
	11月 1日	
	11月 22日	報告会 開催

訪問研修日程

10月	13日 (日)	成田空港 発
	14日 (月)	シドニー空港 着 歓迎会 昼食 シドニー観光 各地へ移動
	15日 (火)	受入企業で実務研修
	~	
	31日 (木)	シドニーへ移動
11月	1日 (金)	ファイナルサミット シドニー観光 送別会
	2日 (土)	シドニー空港 発
	3日 (日)	成田空港 着

AJCE YPEP 2013 報告

日本工営株式会社 海外事業本部 鉄道事業部 鉄道計画
YPEP2013 研修生 深谷 正史



1 はじめに

この度、AJCE 日豪交換研修プログラム(YPEP 2013)の研修生として6月～9月に間に事前研修、及び10月13日～11月1日の三週間に渡り URS のプリズベン支社にて訪問研修を行いました。以下に今回の研修の報告を致します。

2 事前研修

事前研修では、自己紹介や研修内容の調整を先方のメンターとメールベースで行うとともに、訪問先である URS 社とプリズベンという都市について情報を整理しました。

2.1 URS について

URS 社はアメリカのサンフランシスコを本拠とするグローバル企業で、世界約 50 カ国に拠点をもち、従業員は約 56,000 人。同社の 2012 年の売り上げは約 110 億米ドルで、これは同業内で世界第 13 位です。豪州 URS 社は、国内 11 の都市に拠点をもち、在籍するコンサルタントは約 1,000 人。プリズベン支社では、私がお世話になった鉄道部門の他に、道路、環境、土質、水資源の計 5 部門により構成されていました。

2.2 プリズベンについて

プリズベンとはオーストラリアの東海岸北部に位置するクイーンズランド州の州都で、近隣の地域を含めた都市圏人口は約 200 万人となり、オーストラリア第 3 の都市です。入植と開発が始まったのは 1840 年ころ、市制が敷かれたのは 1902 年で、都市としての歴史はまだ浅いものの、近年急速に拡大が進んでいます。気候は一年を通して温暖で、冬は乾燥しますが、夏には最高 30 度を超え雷雨もしばしば発生し、2010 年には大規模な洪水により市中心部が冠水する被害に見舞われています。統計によれば、通勤者の 70%は自家用車を使用し、バスと鉄道の分担がそれぞれ 7%ずつで、バイク・自転車が 2%程となっています。



プリズベンの街並み

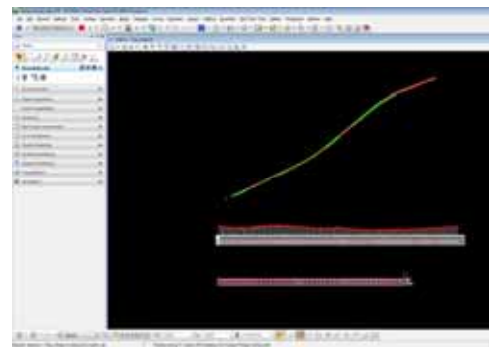
3 訪問研修

訪問研修では、社内にて鉄道・構造のハード技術を学ぶとともに、近隣の 5 か所の現場(施工現場は内 2 か所)を見学させていただきました。

3.1 社内研修

社内研修としては、専用ソフトウェアを用いた線形計画、クイーンズランド州鉄道の基準およびガイドラインの把握、および構造計算のスプレッドシート作成を行いました。

私の専門は主に交通計画などのソフト分野のため、ハード分野である線形計画は初めての業務だったのですが、メンターの丁寧な指導のもと、ソフトの使用法を覚え、線形計画の全体像を把握することができました。



線形計画のソフトウェア(Bentley Power Rail)

クイーンズランド州のガイドラインでは、基準値の画一化や算出式の単純化が見られ、逆に日本の基準の精緻さや厳格性を再認識しました。これは、日本に比して制約条件が緩いことや施工の容易性を重視しているためと考えます。URS 社の鉄道コンサルタントの多くは欧州でキャリアを積んでいましたが、彼らによるとオーストラリアはまだ鉄道後進国で、今後のさらなる都市化の進展や公共交通輸送回帰の潮流に伴い、基準の再整備もあり得るとの事でした。

3.2 社外研修

まず現場に向かう前には、安全に係る入念なオリエンテーションが行われました。これには免許取得時の学科試験のように、安全マネジメントの知識を測るテストが含まれており、それをパスしないと現場見学に参加できません。他にも、現場に向かう車両には水や燃料、発煙筒を搭載するな

どの決まりがありました。URS 社のマネジメントにおいて、安全は最重要項目の一つに挙げられており、その現れといえます。

5 か所の現場見学の内、最も興味深かったのは、ゴールドコーストの LRT システム建設でした。このプロジェクトは、ゴールドコースト市中心部を縦断し、北は病院および大学、南は空港と結節する全長 13km のクイーンズランド州初となる LRT で、最新の LRT システムの導入や、道路交通との連携、及び安全性の確保の点などから、非常にチャレンジングなプロジェクトです。



ゴールドコースト LRT 建設現場

また、どの現場も日本に比して PR に力を入れており、例えば多くの現場には教育や啓蒙のための施設(Visitor Centre)が整備され、PR 専門の案内役の方が在籍していました。FB などを利用した情報発信にも積極的で、事業に対する市民の理解を得ようとする意図が見られました。

4 ブリスベンでの生活

ブリスベンは洪水対策などの点に不安はあるものの、都市計画に住民の意見を取り入れた施策が採用されていることもあり、非常に住みやすい都市であると感じました。

平日の 17 時には社員の 7 割が帰宅し、アフター 5 には趣味に励んだり、友達と飲みに行ったり、家族とゆっくり時間を過ごしたり等、皆思い思いにプライベートの時間を楽しんでいます。



Consult Australia のイベントにて同僚と

ある日、私が少し残業していた際には、メンターから「Don't waste your sunshine! (いい天気もったいないぞ!)」との言葉とともに強制退

社させられてしまいました。全くもってその通りだなあ、と感銘するとともに、日本との勤務・生活スタイルの違いが身にしみた次第です。

そんなメンターや同僚の好意もあって、平日夜には一緒に飲み語り、週末にはサーフィン、空中ブランコ、サッカー、野生イルカの餌付け、ホエールウォッチングなど、様々なアクティビティを体験して、まさにブリスベンの生活スタイルを満喫することができました。私自身もですが、日本のコンサルタント業界では業務量の圧迫による過重労働が慢性化しており、本研修での経験が状況打開の糸口になればと思っています。



シドニーにてメンターの Zisis と

5 おわりに

本研修では社内・社外を通じ、オーストラリアの技術や生活を学ぶことができましたが、なにより貴重な経験は、現地の仲間や同僚との親密な交流であったと感じています。それは単にお互いの情報のやり取りではなく、信頼関係の醸成と今後の更なる関係発展の礎となるものであり、それこそが本研修の最大の成果であると考えています。このような大変貴重な機会を頂いたことを光栄に感じるとともに、同プログラムの今後の継続と更なる発展のために、自分も微力ながらお手伝いできればと思います。



URS QLD Manager の Bob MacGowan 氏と

最後になりますが、本研修への参加にあたり多大なる御支援を頂いた AJCE・CA 事務局の皆さま、現地にて暖かく受け入れて頂いた URS Brisbane 支社の皆さま、また快く送り出して頂いた日本工営鉄道事業部の皆さまのご厚意に、心より感謝申し上げます。

YPEP2013 日豪交換研修の報告

株式会社森村設計 環境部
YPEP2013 研修生 井村修二



1. はじめに

日豪交換研修の応募をしたのが5月でした。いままでに経験の無かった英文の申込書及び職務経歴書を、かなりの時間を掛けて作成したのが懐かしく思い出されます。応募するだけでこんなに大変なものかと思うと同時に、自分がこれまで何をやってきたのか、何をアピールすべきなのかを考える良いきっかけになったと思っています。

私はエンジニアの仕事がもっと一般の人に知ってもらえないものかとよく考えています。また、もっとエンジニア側から情報発信をしていかなければならないとも考えています。今回は海外のエンジニアと直接交流することができる貴重な機会であり、このことについても参考にしたいと思い研修に望みました。

2. 事前研修

私はエンジニアとして建物の環境・設備に深く関わっています。社会的な責務として、環境負荷の小さい建物を増やしていかなければならないと考えています。日本ではこのような建物を環境建築と呼んでおり、海外ではグリーンビルディング又は、サステナブルビルディングと呼んでいます。(以下総称してグリーンビルディング)

そこで、まず各国でグリーンビルディングをどう定義しているか調べることから始めてみることにしました。共通する定義としては、「建物のライフサイクルを通して生じる環境的な責任及び資源の効率性を考慮し、建設し運用する建物」です。

また、この他に興味深い定義を加えている国があることに気が付きました。「執務空間の生産性・健康を得られる建物」(イギリス)、「その地域の気候・伝統・文化および周辺環境と調和する建物」(日本) この特徴的な定義が各国のグリーンビルディングの特徴にも関連しているのではないかと感じました。これらに加え日本のエネルギー事情とオーストラリア・日本の伝統的住宅における環境に関わる要素の差異について、英文のレポートを提出しました。

3. ホストカンパニー

私がお世話になった Norman Disney & Young 社(以下 NDY)は、オーストラリアを拠点にマレーシア・ニュージーランド・イギリス・ドバイ

にも支店を構える世界的な会社でありながら、その業務内容は私の在籍する森村設計ととても似ていました。グローバルスタンダードを体験したかった私には、まさにうってつけの会社でした。



写真1 NDYメルボルン本社の外観



写真2 NDYメルボルン本社の内部見上げ

NDYでは年間ベストエンジニア等の表彰しており、その式に急遽出席することになりました。その名も「EXCELLENCE Awards 2013」、まるでテレビ放映されるのかというような華やかな光景にスケールの大きさを感じ、世界に広がる支社の交流を図ることができ、スタッフのモチベーションにも大きく影響していると感じました。



写真3 スピーチする Ian Hopkins CEO

4. 研修内容

私はシドニー支社とメルボルン本社で研修をおこないました。

シドニー支社では、オーストラリアで最大規模の延床面積 300,000m² 超の Barangaroo Project の地区再開発事業が進んでおり、多くのスタッフがこのプロジェクトに携わっていました。



写真 4 Barangaroo Project 完成予想イメージ

私のメンターは INTERIORS 部門のエンジニアで Barangaroo の内装設計をしていたので、多くの図面を見ることができ、チルドビームを含めた機器の選定見直し補助をおこないました。



写真 5 シドニー支社の INTERIORS 部門 (一部)

また、MECHANICAL 及び BIM 部門のエンジニアとも Barangaroo についてディスカッションすることができ、これらの中で私が感じた注目すべき内容を列挙します。

- ・ 階高 3.8m・天高 2.9m でとてもコンパクト
- ・ 空調は全面的にチルドビームを採用
- ・ BIM 全体のマネージメントを別途受注
- ・ 熱源プラントは海水冷却システムを採用
- ・ テナントに空調温度設定の緩和を要求
- ・ カーボンニュートラルを志向

ディベロッパーも世界各国でグリーンビルディングを手掛けている会社で、そのような会社から信頼を得ることで先進的なプロジェクトを数多く受注していると感じました。

メルボルン本社では、私のメンターは 2 名となり、延床面積 86,000m² の New Bendigo Hospital Project チームのエンジニアと、MECHANICAL 部門のエンジニアで多くの現場視察同行をすることができ、実際の図面作成補助をおこないました。



写真 6 Emprium Shopping Center のヘリテージファサードを残した改築

また、シドニー支社とメルボルン本社それぞれで、主に日本のグリーンビルディングについてプレゼンテーションをおこないました。興味深く聞いて頂き、質問もたくさん頂き大変有意義な時間でした。質問の多くが建物外部の環境に配慮した仕組みであったことが印象的でした。



写真 7 プレゼンテーションの様子

5. 研修を終えて

今回の研修を通じて様々な驚きや気付きがありました。例えば、NDY には若いエンジニアがとても多く在籍し、各部門のマネージャーも半数近くが自分と同じような年齢で、活発な意見交換をしながら、チームをよくまとめているように感じました。また、組織は日本より細かい部門に分かれており、各部門の技術蓄積により組織として効率的に機能していると感じました。

これらの経験を自分の周りのエンジニアとディスカッションすることで、よりよい雰囲気を作り出していきたいと考えているところです。

日豪交換研修 2013 研修報告

株式会社日水コン 水道事業部東京水道部技術第四課
YPEP2013 研修生 安達理央太



2013年10月14日から11月1日に実施された日豪交換研修の報告を記す。私の研修先は Costin Roe Consulting Pty., Ltd. (以下 Costin 社) のシドニーオフィスである。

1. 研修先と研修内容

Costin 社は 1989 年創業で、現在総勢 30 名程度が常勤として働いている。日本のコンサルタント企業の規模からするとかなり少なく感じられるが、オーストラリアのスタンダードでは「中小企業」という位置づけになるらしい。このように小さな会社ではあるが、シドニーのほかにブリスベンやニューカッスル等、全国に 5 つのオフィスがある。

業務内容としては構造設計、土木設計、補修・修繕の工法検討や設計などが主である。とくに 3 つ目はオーストラリア特有(イギリスも?)の単語で”strata” engineering と呼ばれ、初めは何のことかと思ったがこれは remedial と同じような意味で使われているということである。顧客はおもに民間の団体や業者で、この点が私の出身企業(水系コンサルタントでおもに政府や地方公共団体が顧客)と大きく違うところであった。分野も仕事の形態もかなり違う中で「何を学び取れるか」は自分自身にとって大きな命題であり、貴重な経験をさせていただいた。以下にその内容を少し紹介する。

まず Costin 社でのメンター(お世話役)である Mark から与えられたのは、簡単なチェック作業である。工事図面と実際の施工後の図面をチェックし、相違点を洗い出すもので、日本でも同様の作業をしているものと思われる(日本の業務でも実施設計についてはまだあまり深く関わったことがないので残念ながらよくわからない)。紙上の手作業でいいと言われたが、日本人特有の(?)マメさをアピールしようとわざわざエクセルにデータを放り込んで機械的にチェックした。そのデータはそのまま客先に送られたようである。このような雑作業でも、やらせてもらったこと自体がよかったと感じている。

研修期間中でもっとも多かったのが、現地調査への同行である。ある時は建物の目視調査であったり、またある時は建設中の巨大な倉庫の進捗チェックであったり、それこそ日替わりでさまざま

な場所に連れ出してもらった。引率してくれる人もほぼ毎回違っており、このおかげでオフィスのほとんどの人と仲良くなることができた。見るだけでも興味深かったが、何か少しでも自分の実になれば、と大学のときにかじった構造力学を少し復習してみようと思い、テキストを借りて学生気分勉強してみたりもした。普段の業務であまり触れることのない構造設計の部分を学ぶにあたり、この座学と実学の組み合わせはよかったように思う(英語の勉強にもなる)。また、顧客やその他ステークホルダーとの調整役、という日本でも変わらないコンサルタントの役割を目にした



ショッピングセンターの
屋根の視察

のも現場でのことであった。このあたりはどの国にいても変わらないものだ、と共通項を見出した気分だった。

2. 週末の過ごし方

週末の活動についても研修生それぞれが各々素晴らしい経験をしたということは想像に難くないが、私自身の経験は一言でいうと”amazing weekend”だった。Newcastle のブーメラン・ビーチというところに Mark に連れていってもらい、そこで彼の家族と学生時代の友人家族とともに過ごした。ベランダから海を眺めるような別荘で朝起きてのんびり朝食、ビーチに出かけてサーフィンをして疲れたら戻って昼食、昼は再びビーチに出かけ、夜はまったりと飲む。まったくの新参者に対してもオーストラリア人特有のフレンドリーさであたたかく歓迎してもらい、大変心地よい時間を過ごした。この週末のおかげで思わずオーストラリア移住計画を考えてしまったものである。それまで英語は不自由のない程度にしゃべれる自負はあったが、「まだまだだな」と少し歯がゆい思いをしたのもこの時であった。週末最後の日には Mark の家に招待してもらい、プチホームステイとなった。彼の子供たちと庭で遊んだり、自家製ビールをご馳走になったり、日本やオース

トラリアの若者事情について話し込んだりと、あたたかい家庭の雰囲気なかで、職場ではできないような話をすることができた。



サーフィンに挑戦

週末活動についてはまだまだ話し足りないところではあるが、この報告については会社の人や上司も目にする可能性もあり、このあたりで止めておくことにする。

3. シドニーでの生活

仕事に関してはまだまだ若輩者であり、オーストラリアで「技術的な何かを残してくる」といったようなことはできそうにもなかったので、「オーストラリアの生活にできる限り巻き込まれていく」ことを一つの目標とした。宿泊場所を自分で探し、シェアハウスに滞在することにしたのもその一環である。シドニー中心部から少し離れた Surry Hills というところにたまたま安く空いていた物件を見つけ、研修期間中はそこに滞在した。そのおかげで同居人のカナダ人と仲良くなったり、近くの pub に飲みに出かけたり、公園でランニングしたりと「オーストラリアらしい」生活を過ごせた気がする。定時に来ない通勤バスもなかなか楽しかった。シドニーという街は都会部分が比較的コンパクトに収まっており、周辺は植物園や港湾部、公園などある程度開けたスペースが整備されていた。このため東京と違い、通勤でストレスを感じる事が全くなかった（東京と比べたらどこもそうになってしまうかもしれないが）。

会社帰りにスーパーで買い物して自炊してみたり、行きつけのカフェをつくってみたり、ようやくシドニー生活に溶け込んできた...と感じたところに3週間の最後の日がやってきた。

4. 研修成果

行く前は正直なところ「オーストラリア」という国についてそれほど興味があったわけではなかったのだが、今回の滞在は忘れがたい3週間となった。オーストラリアの人のよさ、文化や生活の良さなどを感じるにつけ、それらがとても好きになった。研修で学んだことそのものももちろんであるが、そこでできたつながり、そしてこれから日本で出会うだろうオーストラリア人に対し

て、今度は日本人として「おもてなし」したいと思えたことが私個人としては非常に大きな成果であり、それがこの日豪交換研修の意義のひとつではないかと感じている。

5. 日豪交換研修について

研修で得られるものについては文字通り千差万別である。研修先や研修内容、業務分野によっても大きく異なる。ただ、研修生の能力や内面的な部分で、研修成果に影響を与える因子はある程度絞られるのではないかと思う。たとえば「若さ」「経験・技術」「英語力」「姿勢」である。最近よく耳にする「コミュニケーション力」のようなものは「姿勢」に含まれるとする。このうちもっとも重要なのは「姿勢」であり、他の3つはあったほうが良いというものではなくそれぞれのバランスによって成果がただ「違う」ものになるのではないかと個人的には感じる。たとえば「若さ」と「技術・経験」は基本的には相反する要素であり、若いうちに行くことで得られるもの、逆に経験知により得られるものは根本的に違うもので、どちらが良い悪いというものでもない。研修生の派遣を考えている企業においては、このあたりを考えた方が良いのではないかと思う。以上は私の個人的な意見である。

謝辞

最後になりましたが、本研修を企画していただいた AJCE、CA の皆様、気持ちよく受け入れていただいた Costin 社の皆様（なかでもメンターの Mark と Maria）、研修中に出会って楽しい滞在にさせていただいた皆様、研修への参加を快く承諾し送り出していただいた日水コンの上司、先輩、同僚の皆様がこの場を借りてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。



仕事後の飲み会にて

YPEP2013 日豪交換研修報告



株式会社建設技術研究所 水システム部
YPEP2013 研修生 金子拓史

1. はじめに

10月12日～11月3日にかけて、2013年度の日豪交換研修制度(Young Professionals Exchange Program)の研修生としてオーストラリアのブリスベンにある AECOM 社において約3週間の研修を行いました。以下に研修の概要及び現地での印象について報告いたします。

2. 受け入れ先企業概要

ホストファームの AECOM 社は米国に本拠を持ち、交通・水インフラ・建築・エネルギー・環境等幅広い分野を扱い、世界各国にオフィスを展開しています。オーストラリアにおいては約4,000人の従業員がおり、そのうち2名が昨年度の YPEP に参加しています。

3. 事前研修

Eメールを通じてメンターである Claire さん及び Samantha さん(いずれも昨年度の YPEP 参加者)と在豪中の予定について調整を行いました。当初は Claire さんが窓口でしたが、9月に転勤のため Samantha さんに窓口が変わるというハプニングがありました。しかし二人のおかげで希望した以上の行程を組んで頂きました。

4. オフィスでの研修 - 安全講習

Brisbane の AECOM 社に行き、最初に行ったことは安全講習(Blue Dog Training と呼ばれている)の受講です。一般的な安全確保の方法から雇用関係における義務・権利まで多岐に渡っており、E-ラーニング形式で受講し確認テストを受けました。内容自体は一般的な内容が多いものの、普段使わない単語に苦しみました。オーストラリアにおいてはこのような講習を受講しないと建設現場には入れないとこのことで、日本との安全に対する気の遣い方の違いを感じました。

5. オフィスでの研修 - 河川分野

研修中は Water Infrastructure group に配属され、主に河川や海岸の業務を経験しました。

河川分野に関しては浸水想定業務について勉強しました。作業内容自体は日本とそれほど違いはありませんが、市販のソフトを主に利用している点(日本では河川系は各建設コンサルタント会社が独自のモデルを持っている)と報告書が非常に綺麗に作られている点(AECOM ではグラフィックデザイナーに報告書のレイアウトを任せているらしい)が日本とは異なるところでしょうか。

6. オフィスでの研修 - 海岸分野

海岸分野に関しては、ビーチを新設する際の砂浜の変動量の計算を CERC (Coastal Engineering Research Council) の式を用いて、自作した Excel のワークシート上で簡易シミュレーションを行いました。海岸分野での仕事は初めてでしたが良好な結果も得られ、非常に良い経験となりました。

7. 現地調査

現場見学として、2011年に洪水被害を受けた Helidon ~ Withcott 周辺の被害調査に同行しました。現場は Brisbane から車で一時間以上かかり、ところどころに町があるものの大部分は牧場やブッシュランドとなっている典型的なオーストラリアの風景でした。



図1 見学場所の位置図

調査に連れて行ってってくれた Richard Hancock さんの話では、この地域は周囲を山に囲まれているために降雨から出水までの間隔が短く、また水が集中し水位の上昇が早いために避難が難しい地域であり、約40年に一度の頻度で大洪水が起こり、そのたびに

被害が発生しているとのことでした。

現場に向かう車の途中では今回の調査で想定される危険について事細かに説明を受けました。現場調査におけるリスクは主に3つあり、1つ目は車に轢かれること(街から外れた地域では車の往来が少なく、すごいスピードで通行していることがある)2つ目は野生動物、主にヘビと虫、3つ目は熱中症及び脱水症状とのことでした。ここまで細かく説明する必要があるものなのかとも思いましたが、実際に調査を行ううちにそれらは全て必要な説明であり、命に関わることもあるということを理解しました。(ちなみに、AECOMのオフィスのトイレには尿の色をみて脱水症状に気をつけましょうという張り紙が貼ってあります。)

被害調査はあらかじめ用意してある被害箇所リストに従って淡々と車でまわり写真を撮り、被害の残っているものについては復旧に必要な資材の量などを算出する、というものでした。すでに復旧が行なわれた場所もあれば土砂で埋もれた水路などもありました。



写真 1 被災現場の様子

8. 現地での生活

Brisbane 滞在時は市街地にあるホテルで生活し、バスでオフィスまで通勤していました。Brisbane は街自体がまだ若く人口も増加中なため活気を感じられ、比較的綺麗で生活するには非常によいところだと思います。近年は不景気とのことでしたが(AECOMは昨年オーストラリア全体で雇用者を1,000人削減しています)まだまだ元気があります。ただ物価については非常に高く、バスも10分程度の乗車で4ドル弱かかります。また家賃についても比較的高く、市街地では1軒あた

り週400~500ドル以上するとのこと。日本の家賃を聞かれて、東京周辺はワンルーム1ヶ月で7万円強くらいかな、と答えた際にみなが「それは安い」と言っていて驚きました。

週末についてはメンターのSamanthaがホームステイやブリスベン観光など様々な活動を用意してくれたため、常に新しい発見と楽しみがありました。



写真 2 パドルボード(ブリスベン川)



写真 3 サッカー観戦

9. 終わりに

今回の研修を通じて日豪両国の様々な共通点や相違点に触れることが出来ました。日本における常識は必ずしもオーストラリアにおいては常識ではなく(例えば、オーストラリアでは他人の電話がなっても代理で取り次いだりはしていませんでした)逆もまたそうなのだろうと思います。また防災を考える際に前提となる条件も異なるため、日本の考え方をそのまま輸入することはできないということも痛感しました。

最後に、この研修を素晴らしい物にしてくれたSamantha、及びこのような機会を与えてくださったCTIEの皆様、AJCE及びCAの方々に深く感謝いたします。

YPEP 2013 日豪交換研修報告

株式会社長大 構造事業本部 東日本構造事業部 仙台技術部
YPEP2013 研修生 福澄 浩恒



1. はじめに

2013 年度の日豪交換研修プログラムの研修生として、10月13日～11月3日の約3週間に亘りアデレード市内にある MLEI 社にて研修を行いました。

以下に、事前研修・訪問研修の研修報告を致します。

2. 事前研修

ホストカンパニーの担当者である Nic と E-mail 交換による事前研修を 7 月～出発までの約 3 ヶ月間行いました。

昨年のこのプログラムで私はメンターを経験しました。普段英語を使う環境にないため相手に通じているのか少し不安でしたが、お互いの自己紹介から始まり、滞在先となるアパートの相談や研修スケジュール等のやり取りを行いました。

3. 訪問研修

3.1 Adelaide について

南オーストラリア州の州都であるアデレードは、日本ではあまり知られていない都市ですが、豪州の第 5 番目の都市で文化と芸術の都として知られています。中心地は碁盤の目のように整備がなされ、古い建物や公園も多く街並みも美しいという印象です。人口は 100 万人程度で、アジア人種が多いものの、日本人は少数派で他の都市に比べ少なく、街では 1 度しか出会いませんでした。



写真 1-アデレードの中心にある Victoria Square 前を通過するトラム

日本との時差は 1 時間半なのですが、陽が落ちるのが夜 20 時前後であり、これがワークスタイルやゆったりとした生活スタイルに大きな影響を与えている要因の一つなのだと感じました。

10 月は春にあたるため最高気温が 18 度くらい

でちょうど仙台と同じく少し肌寒い感じでしたが、夏には 40 度を超えかなり暑くなるらしい。

3.2 MLEI 社について

私のホストカンパニーであった MLEI 社は、アデレードに本社を置く建設コンサルタントエンジニアリング会社で、創設よりまだ 4 年と新しく、スタッフも 20 代～60 代までと幅広い年齢構成であるものの、全体で 20 名と比較的規模も小さい。

業務内容もサウスオーストラリア州内の小規模な構造設計(60%)と土木設計(40%)プロジェクトが中心ですが、ここ 1、2 年で工業団地の設計や高層ホテルの改修事業など大規模プロジェクトを受注し、徐々に実績を上げているそうです。

昨年このオフィスに引越してきたばかりで、机は列ごとに長い板が配置され隣の仕切りはなくても皆きれいに整頓されていました。



写真 2-オフィスの様子

3.3.職場環境

就業時間は 9:00～17:00 が基本ですが、制約しているわけではないようで、早い時間に来て 17:00 前に帰宅するなど少し自由度を持たせ各自のライフスタイルに合わせて管理してもらっているそうです。残業もほとんどなく家族や友達と過ごす時間ときっちり分けていました。

社員数も少ないため、親しみやすく皆家族のようで、オフィスにあるキッチンでは、Tea タイムに人が集まり、お菓子をつまみながら意見交換や雑談をしていて、とてもリラックスしていました。

週末にはストックしているワインを飲みながら政治の話や熱く語ったりしていました。

会社社長業も行うメンターの Nic をはじめ若い社員が中心ですが、大企業にあるような教育プログラムはないものの、30～40 年の業務実績のある Senior Engineer がしっかりサポート・教育を

していました。



写真3-キッチンでの TeaTime の様子

3.4.社内研修について

部門は構造設計と土木設計に分かれていますが、私の専門である橋梁の業務は無いため、工事中のプロジェクトを参考に演習を行いました。

構造設計部門では、市内に建設中のホテルの床の設計計算とその図面の確認を行いました。

土木設計部門では、オフィスから北へ約 20km Para Hills にある現在工事中の工業団地の道路計画と排水計画図面と舗装仕様書を参照しました。

日本では橋梁の設計業務をおこなっているため、分野の異なる図をみたり、計算書演習を行うのは貴重な機会となりました。

3.5.社外研修について

数か所の現場へ案内して頂きましたが、図面や報告書を参照した MLEI 社のメインプロジェクトである LIEBHERR Pada Hills(工業団地の建設)では、工場の建築工事・道路の排水施設設置工事や舗装工事の見学と設計変更の協議への同席をしました。週に1度は現場に赴き状況を確認し、何かあれば迅速な対応と的確な指示を行い、十分な信頼関係が構築されている様子が伺えました。



写真4-MLEI 社のメインプロジェクト Liebherr Para Hills

また、南オーストラリア州政府の一大プロジェクトである South Road Superway の現場も案内して頂きました。

4. Adelaide での生活について

滞在先のアパートは、会社から歩いて 20 分くらいでしたが、市内中心を走るトラムやバスが無料区間となっており、たまにこれで通勤しました。

飲食店を含め店の多くは 19:00 には閉店となるため、昼の市場が 21:00 までのスーパーで食料を調達し、久しぶりに自炊もしました。

最初の週末は、市内の中心と周辺にある動物園、博物館や公園等をゆっくり散歩しました。

2 週目は、メンターである Nic family と Thomas family とともに市内より北へ車で 1 時間のところにあるワインの産地 Barossa Valley や Thomas 宅で BBQ を楽しみました。また、南に 2 時間のところにあるカンガルー島では、野生のアシカ、カンガルーやコアラ等の動物にも遭遇し、壮大な自然を体感しました。



写真5-Thomas 宅で Nic&Thomas family と BBQ



写真6-Team MLEI

5. おわりに

今回の研修を通じ、日豪のワーキングスタイル、文化や習慣の違いを直に体感した経験は、間違いなく今後の生活スタイルに影響を与える程、非常に大きなもので、有意義な時間となりました。

本研修に参加するにあたってご支援を頂きました AJCE 及び CA の皆様、受け入れ企業である MLEI 社の皆様、そしてこの研修への参加を快諾して下さった長大仙台支社・関係者の皆様により感謝申し上げます。

YPEP2013 研修報告

国際航業株式会社 第一技術部 まちづくり2G
YPEP2013 研修生 高木沙織



1. はじめに

YPEP2013 に参加した 3 週間（2013 年 10 月 14 日～11 月 1 日）に両国の職場・生活環境の違いを体感し、様々な人との出会いを通じて今後の人生の糧となる非常に貴重な経験をすることが出来ました。国際航業としても本研修に参加するのは初めての試みでしたが、実りある研修成果を持ち帰り、共有することが出来ました。

2. ホストカンパニー

ホストカンパニーは、シドニーをはじめ、豪州東海岸に複数の事務所を有する Northrop Consulting Engineers Pty Ltd. でした。事務所はシドニーの中心業務地区（CBD）にあり、入植時代に建てられた保存建築を改装した建物でした。研修部署は、主に構造部門でしたが、訪問研修では複数の部署を回るなど、多くの方と関わる機会に恵まれました。シドニー事務所には、構造、土木や設備をはじめとする様々な分野の技術者が 70 名程在籍していました。



シドニー事務所の入り口、オフィス

3. 事前研修

研修のメンターである Rodney さんと訪問研修に向け、Eメールで自己紹介、興味のあることや業務内容を紹介し、訪問研修の内容を決めていきました。その中で、研修先の構造部門と私の業務の専門がまちづくりや都市計画で違うため、研修の内容について希望を聞かれました。大学では建築を専攻していたので、構造分野についても積極的に学ぶ意思も伝えましたが、受け入れ先以外の部署も回ることや、様々な役職や立場の方にインタビューをおこなうこと等の調整をしていただきました。

4. 訪問研修

研修のスケジュールは事前研修で話し合ったとおり、計 4 部署を回り、会社・業務紹介のプレゼンテーションを 2 度おこないました。

4-1 研修内容

研修スケジュール

Week1	Structural（構造設計）部門
Week2	Civil（土木・インフラ）部門
Week3	Sustainability（環境）部門 Building Services（室内設備）部門

構造設計部門

打合せに同行したり、施工管理の検査に何度か立会ったり、契約書や仕様書を見ながら管理のプロセスや建設会社との関係などの説明を受けました。仕様書は膨大な量になることもあり、リスクや責任の所在について意識している点が印象的でした。

土木・インフラ部門

日本のまちづくりでも着目されている自転車専用道路の設計業務の現場検査に立ち会いました。シドニー市でもまちの一大事業として整備が進められており、CBD エリアでは既にスーツにヘルメット姿で通勤する姿も多く見られました。



自転車専用道路建設現場

環境部門

以前から興味を持っていた Green Star（建築環境評価ツール）や低炭素まちづくりについて意見交換をしたり、Infrastructure Sustainability というインフラの環境へ与える影響を評価する指標について学びました。また、たまたま、Green Building Council of Australia が主催するセミナ

ーにも参加することができ、豪州の環境政策やそれが経済に与える影響など興味深い講演を聴くことが出来ました。

室内設備部門

室内整備部門でも、建設現場の検査に立ち会いました。そこで照明や空調の配置に問題が発覚し、インテリアデザイナーとの長時間電話会議にも参加し、問題解決のため事実関係をとことん突き詰める姿勢が印象的でした。

プレゼンテーション

研修中、自分の専門や、携わっている業務、会社の紹介をする機会が2回ありました。プレゼンテーションには、合計40名近い方が集まりました。特に、東日本大震災関連業務の紹介には多くの質問が寄せられ、世界中の方が復興を応援してくれていることを改めて実感しました。



その他

Northrop 事務所の向かいでは、NSW 州今世紀最大といわれる大規模再開発 'Barangaroo' が進んでおり、事務局に話を聞く機会も得ることができました。州政府主導の PPP プロジェクトの一つで、大変興味深いものでした。日本の制度との比較など、今後の課題として持ち帰ってきました。



Barangaroo 完成予想模型

4-2 職場環境とワークライフバランス

豪州と日本の職場環境の大きな違いは、多国籍であることが一番に挙げられます。文化や言葉の違いがあるにも関わらず、一定の技術が保たれて

いるのは、管理体制（マネジメント）やコミュニケーションがしっかり取れているのはもちろんのこと、一人ひとりの役割が明確になっているからだと感じました。そのためか、自分のやっている仕事にプロフェッショナルとしての自信をもっているように思いました。

また、ワークライフバランスについては、様々な意見はありましたが、休暇のとり方や平日の夜の過ごし方は非常に柔軟で、それぞれのライフスタイルに合った環境が整っているようでした。それが、仕事のモチベーションに繋がっているように感じました。日本の職場環境においても本研修の報告を通して、働く権利について考え直すきっかけづくりをしていきたいと考えています。



お世話になった部署の方々

5. シドニーでの生活

シドニーはオペラハウスやハーバーブリッジで有名な観光都市です。仕事の後や週末には、主要な観光地を回ったり、メンターの家へ招いて頂いたり、ビーチの散歩や BBQ をしたりと豪州ならではのアクティビティを満喫することが出来ました。



6. おわりに

今回の研修においては、大変お世話になった研修先の Northrop、多大なご支援を頂いた CA、AJCE と研修に快く送りだし、素晴らしい何にも代えがたい貴重な機会を与えてくれた国際航業のみなさまに感謝申し上げます。

また、今回の経験を今後の人生、キャリアに活かしつつ、更なる自己研鑽に繋げ、新しく出会った方々とのネットワークを通じた視野の拡大に努めていきたいと思っております。

YPEP2013 研修報告



株式会社オリエンタルコンサルタンツ 中部支店技術部
YPEP2013 研修生 増田 淳

1. はじめに

今回、YPEP2013 日豪交換研修プログラムの研修生として、2013/10/14～11/2 の約3週間にわたりオーストラリアにて研修を行いましたので、その研修報告を行います。

今回の研修へ参加が認められ、私は以下の3点について学習することができればと考えました。

- ・ オーストラリアにおける受注者と発注者の関係
- ・ オーストラリアにおけるワークライフバランスの考え方
- ・ 日本とオーストラリアのキャリアの考え方

2. 派遣先の概要

私の派遣先は、AURECON 社のブリスベン支店に決定しました。AURECON は、世界各地に拠点を持ち、従業員数 7,000 名以上の総合コンサルタント会社で、土木や建築に関する技術を筆頭に、発電、給電及び低炭素エネルギーに関する技術や、防衛に関する技術を提供しています。

日本ではまず見られない、防衛に関する部署が設置されていることが印象的でした。



写真 1 オフィスの様子

3. 研修内容の概要

本研修は、メンターとの事前研修及び現地研修の2段階から構成されております。以下に概要を示します。

3-1 事前研修

事前研修は、メンターとなる Robert Hickey 氏(以下、Rob)とメールによりお互いの自己紹介及び

専門分野等を紹介しあった後、現地研修内容の調整を行いました。研修内容は、私の希望を伝えた上で調整していただき、下表の内容となりました。

表 1 現地研修のスケジュール

日程	研修内容
10/15	・ AURECON スタッフとの自己紹介 ・ 現地研修の内容説明
10/16	・ GCRT 現場見学
10/17	・ AURECON 社内システムの説明 ・ シティキャット見学
10/18	・ オーストラリア環状高速車線拡幅工事 施工管理見学
10/21	・ シミュレーション部での実務体験 ・ 日豪の道路、自転車通行空間に関する 基準書の比較
10/22 ～ 10/24	・ チャールビルへ移動、ディアマンティ ナ開発高速修繕工事現場見学
10/25	・ QLD 大学で CA 主催就職説明会同行
10/28	・ ブリスベン市交通管制センター見学
10/29	・ ブリスベン港石炭輸送システム見学
10/30	・ 研修のまとめ、送別会

3-2 現地研修

研修では、AURECON の社内システムの説明や、QLD 州各地の様々なプロジェクトの現場見学、報告書や基準書等の閲覧と、自分の専門である交通シミュレーションについて実務を体験させていただきました。

以下に、特に印象に残ったディアマンティナ開発高速修繕工事について示します。

3-3 ディアマンティナ開発高速修繕工事

ディアマンティナ開発高速は、ブリスベンの西約 800 km に位置するチャールビル町から、更に西のエロマンガ町までの約 300 km をつなぐ高速道路で、エロマンガ町の豊富な化石燃料を東海岸地域に輸送する主要な道路です。この高速道路の修繕工事施工管理の現場見学を3日間に渡ってさせていただきました。

ディアマンティナ開発高速が通る QLD 州内陸部は、ゲリラ豪雨やサイクロンによる浸水被害が

多く、最近では 2011 年のサイクロンによる水害で合計 28km に渡り路面が被害を受けていました。

このような状況を解決するために、QLD 州政府、ムアウェ市役所が 100km に渡る同高速道路の改修工事を企画し、私の派遣先である AURECON を筆頭に、コンサルタント会社 3 社とコントラクター 1 社による JV で受注し修繕工事を進めています。

現場では、路床となる土とセメントパウダーを混ぜ合わせ、適切な支持力を有した路床となっているかチェックを行っていました。

また、事務所では、本業務に関する図面を拝見させていただきました。



写真 2 施工不良がないか、約 100 km に渡り点する施工箇所を回ってチェック

4. 日豪の考え方の違い

4-1 業務形態について

オーストラリアでは、複数年に渡る業務が多く、また基本的に技術提案による受注形態となっています。また、コンサルフィーは非常に高く、オーストラリアにおける技術者の地位の高さを確認することができました。

4-2 仕事の仕方について

ワークライフバランスは、自らのプライベートを最も大切に考える文化が浸透しており、深夜まで残業している方は皆無でした。

AURECON ではフレックスタイム制を採用しており、週 40 時間働けば、出勤、退勤時間は自由に設定できるようでした。

4-3 キャリアパスについて

また、転職は盛んに行われており、自らのキャリアアップのために役所とコンサルタント間や、コンサルタントを渡り歩き、様々な業務を経験する技術者が一般的だそうです。また、雇用側も

様々な経験を有する技術者を求めているようでした。

5. オーストラリアでの生活

オーストラリアでは、会社近くのウィークリーマンションを借りて生活をしました。オーストラリアは、日本に比べ物価が高く、外食するには少々厳しいと感じたため、できる限り自炊を行いました。しかしながら、ほぼ毎日飲み会に誘われておりましたが.....。

Rob 氏には休日も様々な場所へ連れて行っていたいただき、充実した週末を過ごすことができました。



写真 3 ゴールドコーストの海

6. おわりに

今回の研修に参加させていただき、日本とオーストラリアの業務形態の違いやライフワークバランスのスタイルの違いを感じることができました。本研修に参加するにあたりご指導・ご支援を頂いた AJCE・CA 両事務局の皆様、受入企業である AURECON の皆様、また研修に参加する機会を下さり、オーストラリアに送り出して頂いたオリエンタルコンサルタンツの皆様のご厚意に心より感謝いたします。

日豪交換研修 2013 行事報告

株式会社日水コン 水道事業部東京水道部技術第四課
YPEP2013 研修生 安達理央太
株式会社オリエンタルコンサルタンツ 中部支店技術部
YPEP2013 研修生 増田 淳

2013年10月14日から11月1日にかけての3週間、日豪交換研修生として7名のエンジニアがオーストラリアに滞在した。この稿ではCA（Consult Australia, オーストラリアのコンサルタント協会）の主催により研修初日および最終日に実施された研修生全員参加の活動について紹介する。

初日：ウェルカムセレモニー

10月14日朝。シドニー都市部のオフィスビル21階、眺めの良いAECOM社の1室でウェルカムセレモニーが開催された。会が始まる前の時間、研修生とそれぞれの研修先企業でのお世話役（このプログラムでは「メンター」と呼ばれる）はなんとなくお互いを確認し、なんとなく雑談しつつ、なんとなく初顔合わせを済ませている。メンターの中には1年前、研修生として日本に来ていた顔ぶれもちらほら見られた。

セレモニーはCA事務局長Megan女史の挨拶から始まり、研修生とメンターそれぞれが「自己紹介」と「このプログラムに対する期待」を述べていく形で進行した。正直なところもう少しフォーマルな会を想像していたが、オーストラリア特有(?)のゆるくフランクな雰囲気が会の間じゅう漂っていたのが印象的だった。そのおかげか、日本勢(私含め)の緊張した面持ちもすこしずつ解けていったように見えた。

その後昼食を済ませ、一同そろそろとシドニー街歩きへと出発した。



ウェルカムセレモニー

初日：ダーリングハーバー ~ ワイルドライフ・シドニー

まずはダーリングハーバーと呼ばれる港湾エリアへ。日本出発前、友人に「紫外線には気をつけて」とわざわざ言われたのがうなずけるほど日射しが強い。このエリアもいわゆる「touristic」な場所であるが、かの有名なオペラハウスは高層ビル群をもうひと山越えたところにあるらしく、残念ながら見えなかった。湾沿いにbarやレストランが立ち並んでいたが、どこもそれなりの「観光地価格」であるとのこと。

そのままてくてく歩くこと5分、都市のど真ん中にある動物園「ワイルドライフ・シドニー」の入口へ。中はこぢんまりとはしていたが、さまざまな種類の動植物が見られた。ここの目玉は「世界最大級のワニ」らしく、眼下に現れたものはたしかに巨大であった。しかしじっとして動かない。初夏の陽気のなか、ワニも観光客へのサービスよりひなたぼっこを好んでいるようであった。

動物園を出たあとは各々解散の雰囲気となり、メンターに連れられた研修生は不安と期待を胸にそれぞれの研修地へと旅立っていった。

(後半へ続く)



シドニー・ワイルドライフ

最終日：ファイナルサミット&フェアウェルパーティ

11月1日朝。長いような短いような、とりあえず内容の濃い3週間を堪能した研修生とメンターが再び集まった。この期間でどんなことを経験し、

自身の深いところで何を得たのかについては本人のみ知るところであるが、心なしか皆の表情が



ファイナルサミット・ディスカッション

「精悍」になったように見える。ただ中には研修生を置き去りに、一足先に休暇旅行に出かけたメンターもいた（他ならぬ私のメンターである。しかしながら私個人の意見としては、そのあたりがオーストラリアでの「ワーキングライフ」の尊敬すべき部分でもあると感じている。最終日には代わりに（といひかなんといひか）会社の創業者の一人に来ていただき、逆に恐縮してしまった）。

この日はまず、メンターと研修生がプログラムで経験したことの「要約」を順番に発表した。自分自身と同じ分野で何かを学び取ったもの、違う分野で新しい世界を広げたもの、逆に相手に対して日本の技術を伝えたもの、とりあえず楽しんだもの、今回の滞在で以前はそうでもなかったオーストラリアが大好きになったものと様々であったが、全員が共通して「非常に有意義な3週間を過ごした（と書くときこしカタい感じがするが）」ということは間違いない。メンターの側でも、お世辞ではなく皆ポジティブな感想を述べてくれた。

その後ファイナルサミット（別紙にて報告）を終え、最後の思い出のシドニー観光へと出発した。

最終日：シドニータワー・アイ ~ オペラハウス ~ ディナー ~ 夜の街

最終日のシドニー観光ではシドニータワー・アイからの眺望を楽しみ、オペラハウスへと下って各々ビールやカクテルをたしなんだ。私自身構造設計は専門ではないが、オペラハウスの構造は間近でみて興味深いものであった。噂に違わないオーストラリア人のフレンドリーさとお酒の力も手伝って、研修生とメンターたちの会話も弾んでいた。研修期間中もよく聞かされて驚いたのが、

「スキー」を目的に日本に来るオーストラリア人が非常に多いことである。「ニセコ」や「ユザワ」といった地名をオーストラリア人から聞くことになるとは思ってもみなかった。どうも世界的にみても雪質が良いらしい。

その後はステーキハウスへ移動し、オーストラリアらしいステーキのディナーを味わった。この時点でお酒も十分に入り皆やや疲れ気味の様子であったが、せっかくの最終日ということで次の店へ。金曜の夜ということもあり、多くの人でにぎわう bar にてアルコールをさらに流し込む。このあたりは日本もオーストラリアも変わらないな、と改めて感じたものである。この後が少し心配になるような状態の者もいたが、皆無事に帰れたようであった。

以上、主な行事の活動報告を終える。研修生個人の研修報告はそれぞれの稿をご覧頂きたい。最後に、このようなイベントを提供していただいた CA と、日本のカウンターパートである AJCE の皆様にこの場を借りて改めてお礼申し上げたい。

Thank you very much for your hospitality & organizing enjoyable events in Australia.



シドニータワー・アイ



オペラハウスにて、ハーバーブリッジを背景に

YPEP2013 Farewell Summit の報告

日本工営株式会社 海外事業本部 鉄道事業部 鉄道計画部
 YPEP2013 研修生 深谷正史
 株式会社森村設計 環境部
 YPEP2013 研修生 井村修二

1. Farewell Summit の概要

今回の研修の締めくくりとしてすべての研修生とメンターが一堂に会し、今回の研修を通じて特に印象に残っている経験やこれからの人生にフィードバックしたい経験等、それぞれ 2~3 分間のフリートークをおこないました。また、日豪交換研修の意義についてグループディスカッションをおこない、グループ毎に挙げられた内容の発表をおこないました。

2. フリートーク

オーストラリアでの 3 週間の研修は、すべての研修生とメンターにとって貴重な経験であったことがよく分かりました。メンターは受入れた研修生について、全員に解りやすく説明をしてくれました。研修生もお世話になったメンター及びオーストラリアコンサルタント協会に対する謝意のこもった話をしていました。

Welcome Ceremony でも同じようにフリートーク（主に自己紹介）をしていたので、研修生の英語に対する姿勢が変わったこともよく分かりました。きれいな英語ではなくても相手に伝えようとする気持ちが分かりました。例えば、後でメンターから「ストレートな表現でよかった」という意見があったのが印象に残っています。

また、メンターの話で研修生のエンジニアリングスキルに直に触れ、大変参考になったとの意見もあり、やはり研修に対して積極的に望み、表現をすることにより、メンターにとっても有意義な経験になるのだと感じました。



写真 1 フリートークにコメントする Wayne Costin CEO (Costin Roe Consulting)



写真 2 フリートークの様子

3. グループディスカッション

初めに日豪のエンジニアを取り巻く環境の相違点及び類似点についてブレインストーミングをおこないました。挙げられた内容で代表的なものは下記の通りです。



写真 3 グループディスカッションの様子

【相違点】

- ・ オーストラリアは日本に比してクライアントと対等な立場にある。
- ・ ワークスペースが異なる。例えばオーストラリアのデスクの広さは日本の 3 倍程。
- ・ 日本のコンサルタントは長時間労働が当たり前となっている。
- ・ オーストラリアは Team Management によりチームが責任を負う印象が強い。日本は各専門家の責任が大きい印象がある。
- ・ オーストラリアは実力重視、日本はまだ年功序列の色合いが強い。

【類似点】

- ・ 要求されるプロの資質はほぼ変わりはない。
- ・ 要求される作業量や成果品の質も似ている。
- ・ とともに環境に配慮した技術や事業を促進している。
- ・ Project Management はよく似たシステムであった（特に海外事業）。
- ・ 企業倫理の厳格性も同じようなレベル。

次に日豪交換研修の意義について意見を出し合い、グループ毎に発表をおこないました。

【日豪交換研修の意義】

- ・ 交流が進展していけば、専門家の様々な経験という知的財産を共有することが出来る。これは、お互いの業務において競合しない。
- ・ 参加している個人だけでなく、会社全体にとって刺激を与える価値ある経験とすることも出来る。
- ・ 他の執務環境に触れることで、自分の会社の執務環境における知的生産性やスタッフの幸福度について考えるきっかけとなる。
- ・ メンターや受入れ会社にとっても、他国の業務の進め方を知ることによって、自分の会社のそれを再確認することが出来る。



写真4 ディスカッションした内容の発表

今回のディスカッションでは、主として考えられる内容の列挙をおこないました。日豪交換研修に関係するすべての人にとって、このテーマについてディスカッションを重ねていき、今後参加する研修生とメンター個人だけでなく、それぞれの会社にとっても有意義なものにしていくことが重要なことであると感じました。

4. おわりに

Farewell Summit の終わりには、日本コンサルタント協会からオーストラリアコンサルタント協会へのお土産として、日本の職人手作りのヒノキ格子額とそれにピッタリの富士山の写真集を贈呈しました。



写真5 日本のお土産を手渡す国際航業(株) 高木さんとオーストラリアコンサルタント協会 Gillian さん

貴重な機会を与えて下さった。オーストラリアコンサルタント協会、AJCE 及び各研修生が在籍する会社の皆様、ありがとうございました。

また、受入れ会社の皆様、特にメンターの方々には、日本から来たエンジニアに多くの時間を使得頂き、丁寧に業務の説明等をして頂きました。仕事後にも食事や飲み会、休日には観光に誘って頂き、とても楽しく過ごすことが出来ました。本報告書ではあまり書いてはませんが、フリートークでメンターの方と一緒に行った休日の観光の思い出話が多く聞かれ、公私共に充実した研修だったことがよく伝わってきました。



写真6 テーブルには日本でもお馴染みのお菓子

日豪交換研修 2013 報告会

(株)日水コン 海外事業部技術部 担当課長
技術研修委員会 YP 分科会長 赤坂 和俊



はじめに

日豪交換研修 2013 (Young Professional Exchange Program : YPEP2013) の報告会が 11 月 22 日 (金) に日本工営(株)会議室において実施された。参加人数は 40 名。

会長挨拶

廣瀬 AJCE 会長より、「現在コンサルティングエンジニア (CE) 産業にとって、若手技術者の育成は世界的に大きな課題であり、15 年以上にもおよび YPEP 活動は非常に先駆的かつ貴重な試みである。今後さらに継続していくことが重要である。研修生のみなさんは、是非この研修で得た素晴らしい経験を今後活かしてほしい。」との挨拶を頂いた。



廣瀬会長からの挨拶
(YPEP 継続と素晴らしい経験を今後に !)

研修報告

研修報告は概ね次の内容について報告され、各研修生の熱が伝わる報告であった。

【研修内容】

実業務の補助作業、現場見学、専門分野の内容に関する研修に関する報告があった。研修生の専門分野以外の補助 (?) での戸惑いを含む経験談に微笑ましいものを感じた。

【余暇の過ごし方】

サッカー観戦、サーフィン、BBQ、飲み飲み飲み、などなどなど。

仕事とのメリハリ、まさに「ワークライフバランス」という言葉を実感としたことがヒシヒシと伝わってきた。日本での仕事 (公) と個人 (私)

のあり方について考える良い機会になったと思う。また、個人的に筆者の参加した過去 (YPEP1999) の楽しさが想起され、非常にウキウキした。

【印象的なキーワード】

- ・時間当たりのフィーが違う。日本の 3 倍 !
- ・海外プロジェクトでは同程度。
- ・国内プロジェクトが安すぎる ! !
- ・豪州は転職が当たり前。
- ・会社側は職場環境を整えるのに注力。
- ・豪州のデスクの広さは日本の 3 倍 !
- ・水道水にフッ素 (歯に良いという理由)
研修生曰く “ うまくない ”
- ・ No Worries
- ・ Youthfulness (若さ) Work experience (技術・経験) English skill (語学力) Attitude (姿勢) 何よりも Keep it going
YP 分科会の方針と合致。
- ・豪州の CE はカッコいい、子供が憧れの職業。
- ・豪州ではクライアントと同様の立場。
- ・絞り込んだメンバーによる会議で時短。
(“ とりあえず参加 ” はなし)

グループディスカッション

グループディスカッションは 4 つのテーブルで、研修生による進行、意見のとりまとめ・発表という方式とした。

今回のテーマは、以下のとおりである。

コンサルティングエンジニアのキャリアパスとは !

【ディスカッションのまとめ:意見】

まとめ

- ・豪州の方が転職に対するハードルが低いのでは。
- ・豪州ではダブルディグリーの技術者がいるなど、違う分野への転職 (移動) が容易 (極端な例では、ギター職人へ、など) 。
- ・日本の組織では部門間の壁が高いのでは。
- ・豪州は多民族国家のため、バックグラウンドが異なる。そのため、新しい世界に飛び込むことに躊躇がないのではないが。
- ・各人が仕事のしやすい環境づくりに心掛けることが重要。

まとめ

- ・ワークライフバランスといっても、人によってそのバランスは異なる。
- ・職種の選定について、業務内容、賃金、ライフスタイル、年齢、等の多くの要素のバランスによって決まる。

まとめ

CE のキャリアについて、豪州と日本の違いは何？

- ・社会的地位が違いすぎる。
- ・エンジニアとしての価値が違う(?)から、フィーが違うのでは。
- ・CE として生きるなら、良い環境を求めたい。
- ・根本論は CE 産業を向上させることだろう。
- ・パブリックリレーション(PR)が豪州では明確であり、日本では少ない。もっと実施すべきだ。
- ・このように公共への発信がカギになるのではないかな？

まとめ

働き方の違いなど、色々

- ・日本ではオールラウンダーが求められるし、そうなりたいと思っている技術者は多いと感じる。
- ・豪州では役割分担が明確で、プロジェクトマネジメントがしやすい。
- ・官と民の立場の違いが大きい。
- ・日本では、民 官への転職は多いが、その逆はレアである。
- ・民の立場を上げるためには・・・どうすれば良いかなど。



白熱する議論



討論内容をまとめる

閉会の辞

森村技術研修委員長より、研修生及び参加者へ

の次のエールを閉会の辞とされた。

- ・今回の経験をフレッシュなうちに受け入れて、CE として今後につなげてほしい。
- ・今年は FIDIC100 周年記念大会であり、この 100 年間で優れたプロジェクトでオペラハウスが受賞しており、その設計者である建築家 Jorn Utzon (ヨーン・ウットソン) はまさにスターエンジニアである。是非、皆さんにもスターエンジニアを目指してもらいたい。

おわりに

YPEP2013 は、「コンサルティングエンジニアのキャリアパスとは!」というテーマをもって現地研修に赴いて頂いた。そのため、ヒアリングによる豪州 CE の生の意見を聞くことができ、非常に面白く、興味深い報告会となった。

今回の取り組みを今後も継続することで、国内における CE 産業の問題点を把握するのに役立つと考える。社会的なバックグラウンドの違いによる CE の地位の違いは大きいですが、少なからず、まだ実践できていないことがあるはずである。その存在に気づくには、海外の CE との違いを実感することが、一番の近道であると感じた。

上記の機会を提供するのが YPEP であり、AJCE である。その運営を執り行う YP 分科会の位置づけは重要であり、さらにこのような場を提供し続けたいと強く思った。

研修生のみなさん。この良い経験を全て自分のものとし、周りに広げていってください。

そして、YP 活動への参加を切望します。ご検討下さい。

最後に、ご多忙中にも関わらず、今回の報告会にご参加頂いた皆様に深く感謝申し上げます。

